

## 河川に生息する生物の確認状況（河川の自然度・健全度）

ここでは私たちにとって馴染み深い昆虫類の確認状況や、水域と陸域との接点である水際域に特徴的な種の確認状況を整理しました。なお、前回、前々回調査との比較は、調査の範囲や時期、回数などの条件が必ずしも同一ではありません。また、移動性の高い種や、限られた季節にしか見られない種もあることから、比較結果は同一河川での消長を示すものではなく、全国的な傾向を把握するための参考です。

## 陸上昆虫類等からみた河川の現況

### 【ゲンジボタルとヘイケボタルの確認状況】

（陸上昆虫類等調査）

- **ゲンジボタルを7河川、ヘイケボタルを5河川で確認**  
ゲンジボタルは今回調査では、関東地方1河川、北陸地方1河川、中国地方4河川、九州地方1河川の計7河川で確認され、前回確認されなかった九州の河川でも確認されました。  
ヘイケボタルについては、今回調査では、東北地方の高瀬川、北陸地方の小矢部川、中部地方の庄内川、中国地方の日野川、四国地方の物部川の5河川で確認され、ゲンジボタルよりも確認された河川数は少ない結果となりました。また、出現河川を前回調査、前々回調査と今回調査で比較するとほとんど一致が見られませんでした。

（資料掲載: 6-5～6-6、6-23 ページ）

### 確認河川数の比較（対象河川: 21河川）

種類	前々回調査	前回調査	今回調査
ゲンジボタル	4河川	9河川	7河川
ヘイケボタル	6河川	5河川	5河川

日本には40種あまりのボタルが生息しますが、幼虫が水中生活をする種はゲンジボタル、ヘイケボタルおよびクメジマボタルの3種だけで世界的にも珍しい生態を持つ種類です。

ゲンジボタルとヘイケボタルは全国的（ゲンジボタルは北海道を除く）に生息していますが、ゲンジボタルが主に山地の清流などに生息するのに対し、ヘイケボタルはより流れの緩やかな小川や用水路など平地や丘陵地を主な生息場とする傾向がみられます。

ゲンジボタルは各地で、飼育や放流がなされていますが、発光のパターンに地理的な変異が観察されています。そのため、地域を越えた安易な放流による遺伝的な多様性の喪失や生態系への影響が懸念されています。





【オオムラサキの確認状況】

(陸上昆虫類等調査)

• オオムラサキを2河川で確認

オオムラサキは今回調査では東北地方の阿武隈川、関東地方の富士川の2河川で確認され、これは前回調査と変化がありませんでした。前々回調査で確認された四国地方の物部川と仁淀川では前回調査に続き、今回調査でも確認されませんでした。

(資料掲載: 6-8、6-23 ページ)

確認河川数の比較 (対象河川: 21 河川)

種類	前々回調査	前回調査	今回調査
オオムラサキ	4 河川	2 河川	2 河川

オオムラサキは大型のタテハチョウで、北海道南西部から九州までの広い範囲に分布しています。幼虫は河畔林を形成するエノキやエゾエノキを食草とし、初夏に成虫となります。成虫は飛翔能力が高く、クヌギやコナラの樹液、熟した果実等に集まります。雑木林などの生息環境の減少による本種への影響が懸念され、現在は環境省(庁)のレッドリストでは準絶滅危惧に指定されています。



【コオニヤンマの確認状況】

(陸上昆虫類等調査)

• コオニヤンマを7河川で確認

コオニヤンマは今回調査では、北陸地方から九州地方にかけての7河川で確認され、前回調査の7河川、前々回調査の6河川とほぼ同数の河川で確認されました。

(資料掲載: 6-10、6-23 ページ)

確認河川数の比較 (対象河川: 21河川)

種類	前々回調査	前回調査	今回調査
コオニヤンマ	6河川	7河川	7河川

コオニヤンマは、国内では最大のサナエトンボ類で、日本に広く分布し、平地から山地の河川に広範に生息する種です。生息には、浅瀬や流れの緩やかな砂泥底、水際の植物などの環境条件が必要です。

コオニヤンマは底生動物調査でも確認されていますが、対比のためここでは陸上昆虫等調査結果のみを取り扱いました。調査結果としては、底生動物調査のほうが多くの河川で確認され、幼虫による確認のほうが容易であると考えられます。



• ミズギワカメムシ類を 5 河川で確認

水際に生息するミズギワカメムシ類の確認状況を整理しました。

今回とりまとめを行った 21 河川では、北海道地方から四国地方までの 5 河川で確認されました。これらの水際の湿った地表を生息の場としているミズギワカメムシ類の出現種数を河川別にみると、北海道地方の手塩川で 2 種、阿武隈川、日野川、斐伊川、仁淀川で 1 種、その他の 16 河川では確認されませんでした。

(資料掲載: 6-12、6-23 ページ)

水際に生息するミズギワカメムシ類の確認状況から、陸域と水域との連続性の評価を試みました。この類の種は体長が 5mm 以下と小型のものが多く、人目に付きにくい種です。

本属の種は水際の湿地や岩間を生息環境とすることから、水際にコンクリート護岸が多い河川では生息が困難になると思われます。したがって、ミズギワカメムシ類の確認頻度が高い河川では、水域と陸域の連続性が保たれていると考えられます。



